

『ユートピア』の虚構性と植民戦争^①

久野幸子

一 序論

トマス・モア著『ユートピア^②』の第二巻で航海者ラファエル・ヒュトロダエウスが語るユートピア国は戦争のない平和で豊かな社会ではない。ユートピア人は「戦争を極端に嫌って」(二〇三)いながら、実は自国が戦争に負けることを最も恐れるため、常に戦う準備をしている。従って、ユートピア国とその友邦国が戦争に勝つためなら、ユートピア人はありとあらゆる戦略・謀略を用い、卑劣と思われる手段まで駆使することを厭わない。ユートピア人は、知性の力で敵に勝つことを自慢に思う。そこで、敵側の内部抗争を画策し、裏切りを煽る。戦闘に際しては外人傭兵を多く雇用するが、彼らが戦死することをこの世から極悪な人間を取り除くことになるから、「全人類から最高級の感謝を受ける」(二二一)だろうとまで言っている。そもそも、この第二巻には「軍事について」という章があ

り、城塞の造りかたや突撃のしかた、武具や武器の使いかたなどについても詳しく語られており、この巻全体の約八分の一を占めているほどである。勿論、この章以外にも、戦争に関する記述は散在している。たとえば、この島の島名の起源となったユートプスは、武力を用いて原住民を平定、彼の国ユートピアを建国したと伝えられているし、このユートピア国には、「みずから起こした戦争で捕えられ」(一八八)、奴隷として働く捕虜もいれば、前線で「祖国の勝利」(二三一)を願い、戦争被害を減らそうと走り回る司祭たちもいる。そこで、ユートピア国はユートピア人にとっては理想国であったとしても、近隣諸国にとっては、恐ろしい隣国ということになる。そのような国をヒュトロダエウスは理想社会と呼んでいるのである。ところが、そのヒュトロダエウスが第一巻ではあくまで戦争に反対している。彼のような広い知識と豊富な経験をもつ人がなぜ、宮仕えしないのかと聞かれて、どこの国の王も臣民の幸せより、戦争

によって自国を大きくすることばかり考えているのだから、そのような王たちに仕える意味はないと答えている。彼は、軍備については、国が常備軍をもてば、国費が高み、傷痍軍人や老いた軍人の介護が市民の負担になり、軍人たちは得てして謀反を起こし易く、外人の傭兵たちは彼らを雇用した国の乗っ取りを図るだろう、とそのままの弊害を指摘する。そして、彼が、航海中訪れた多くの国々のなかでとくに三つの国の名前を挙げているが、それぞれ、次のような理由による。まず、ポリュレリト人の国は、ペルシャ帝国の属国として、過去数十年間巧みに戦争を回避してきた。アコール人の国では、王が自国と戦争で手に入れた新しい国の両方を統治しようとしたが統治できずに、結局、新しい国を手放している。そして、マカレンス人の国では、王が他国に不当な侵入をしないように王庫の額を制限する取り決めが王と臣民との間にあるという。つまり、ヒュトロダエウスはこれらの国々の戦争回避への取り組みを賞賛しているのである。

このように、ヒュトロダエウスの戦争への態度は第二巻と第一巻とでは微妙に異なり、矛盾している。勿論、彼は第二巻では語り手としてユートピア人たちの考え方や制度を紹介しているだけにすぎない、という弁明がなされるかもしれない。しかし、彼はユートピア人たちの諸制度は「事実優れている」(二〇七)とかユートピアの人々は「この世界の人よりもっとよくできた人々」(二一四)などと明言しているのだから、単なる紹介者ではないはずである。そこ

で、詳しく考察してみると、確かに、第一巻でヒュトロダエウスが批判しているのは、王たちが自分たちの強欲のために戦争をしている事実であり、第二巻でのヒュトロダエウスは、共有社会において民主的に選ばれた指導者たちにしても、自国民を守るために、あるいは彼らの理想的な体制を維持するためには、他国との戦争はどうしても避けられないという、ユートピア国が直面する現実の厳しさを認めているようである。そして、第二巻をさらに綿密に検討してみると、たとえば、ヒュトロダエウスはユートピア人が戦争を正当化する理由を列挙しているが、彼らの戦争を嫌うという言明と、正義の戦争は行なうという言明とが、実は形式と実質、あるいは建前と本音という関係にあるように、そこにさまざまな論理的矛盾があることに私たちも思い至る。つまり、ヒュトロダエウスが戦争や軍事について語る内容には、第二巻と第一巻の間に食い違いがあるだけでなく、第二巻そのものにも矛盾が存在している。要するに、人間社会と戦争との関係はそもそも矛盾に満ちた不条理なものであるがゆえに、ユートピア人の戦争論も批評家によるさまざまな解釈を誘う、自家撞着に陥りがちなものにならざるを得ないのであろう。では、作中人物のトマス・モア(今後は便宜上モルスと呼ぶ)は戦争、あるいは軍事について一体どのように考えているのだろうか。第二巻の結末部分で、ヒュトロダエウスの話を聞き終えたモルスは、ユートピア国の「生活風習、法律のなかでずいぶん不条理にできているように思われた少なからぬ事例」(二四五)が彼のこころ

に浮かび、彼らの「戦争のやりかた」(二四五)もそのひとつであるとしている。しかし、他の「少なからぬ事例」と同様、この「戦争のやりかた」についても、その時点で不条理と考える理由を明確に示し、真剣な討議を再開させようというわけではない。つまり、『ユートピア』における戦争や軍事に関する見解は、残念なことにあいまいなままである。では、このあいまいな見解とこの作品を書いた作者モアとはどのような関係にあるのだろうか。言い換えれば、そもそも、モア自身は戦争、あるいは軍事についてどのように考えていたのだろうか。確かに作者モアが登場人物の一人モルスとして作品に登場しているが、そのモルスは作者モアその人ではないのだから、実は作者の真意はこの作品のどこにも直接、語られてはいない。いや、モアは語ろうとはしていないのである。

と、ここまで、戦争、あるいは軍事という制度について、話を進めてきたが、第二巻で叙述されているユートピア国の制度や生活習慣、たとえば、奴隷、宗教、職業、役職、相互のつきあいや旅行などについても、作者モアの真意を捉えることは、読者にとって容易なことではない。私たちは、結局、この『ユートピア』は一見、単純で明解な作品に見えるが、実は極めて複雑な多層的構造をもった文学作品であるという重大な事実を想起することになる。そもそも、この作品はプラトンの『国家』の流れに沿う理想国家論であり、一方、ローマのギリシャ語作家ルキアノスの『本当の話』の流れを担う諷刺を第一の目的とする架空旅行記でもある。さらに、この作

品には、これら二つの流れ以外にも実にさまざまな古典の伝統や「お菓子の国」などの民間伝承が流れ込んでいる。語りの構造にしても、この作品は二つの部分からなるが、第一巻が三人の人物、モルスと友人ピーター・ヒレスとヒュトロダエウスによる鼎談の^②に、第二巻がヒュトロダエウスによるほぼ一方的語りであること、作中人物として作者自身や実生活上の友人が登場すること、第一巻に登場するヒュトロダエウスと第二巻でユートピア国について語るヒュトロダエウスとの間に人としての一貫性がなく、従って、ヒュトロダエウスその人が信頼できないことなど、多くの問題点が存在していることに気づかざるを得ない。そのうえ、この作品には、架空であるはずのユートピア国の地図、そこで使用されているアルファベット、ユートピア慣用語で書かれた四行詩などがいかにもユートピア国の存在を実証するかの^③ように添えられている。加えて、本文とともに、つねに十三篇がそろっているわけではないが、パララ「付録」と総称される詩と書簡が出版されており、これらの小品の存在もそれぞれが極めて意味深長なのである。

そこで、本稿では、ゲイリー・ソール・モリソンの用語を借用して、『ユートピア』におけるすべての文学的手法や技巧を『ユートピア』の虚構性^{フィクションナリティー}という言葉で統一し、前半では、この作品の虚構性について、地図とパララガを中心に詳しく検討し、後半では、戦争というテーマを取り上げ、とりわけ、現在もなお、多くの学者を悩ませ続けているユートピア人の植民戦争について考察してみた

い。

二 作品の成立

(一)『ユートピア』の執筆について

この作品の第一巻の冒頭で、モルスはヘンリー八世が大陸に送ったカステイリア公シャルルとの通商交渉に携わる委員の一人としてブルージュに滞在中、数日間ひまができ、アントワープへ出かけ、最近航海から帰ったヒュトロダエウスと出会い、彼の話聞いたと述べている。実在の人物としての作者モアも、同じような任務でブルージュに滞在中、一五一五年七月末から十月末にかけて約三ヶ月間という時間的余裕が与えられ、まず、第二巻を執筆する。そして、帰国後、ロンドンの自宅で第一巻を執筆、一五一六年九月に二巻からなる『ユートピア』を完成させた、というのが、現在最も一般的に受け入れられている執筆状況である。とはいっても、モアが第一巻を書きながら、すでに書き上げてあった第二巻の原稿の一部に手を加えたであろうことは充分考えられる。一九五二年、J・H・ヘクスターは『モアの「ユートピア」—ある思想の伝記³⁾』で、『ユートピア』の完成にいたるモアの創作過程をモア自身が加えたであろう修正も含め大胆に推測した。ヘクスターの推測はそれなりに興味深い。が、あくまでも仮説でしかなく、モアがどのような過程を経てこの『ユートピア』を完成させたのかは、現在も不明なことが多い。では、出版はどのように行なわれたのであろうか。

(二)『ユートピア』の出版について

この作品はモアが生きている間に四回出版されている。本文に関しては、みな同じだが、地図やパラグラフは、四版は三版とほぼ同じ構成であるものの、一版と二版と三版は、実はそれぞれ少しずつ異なっている。それでいて、モア自身が一版から三版までは出版に直接関わったと考えられている。ここで、『ユートピア』のモア生前の出版状況を表にしてみよう。(並べる順序はパラグラフ十三篇全部を収録しているイェール版によっている。)

次頁の表について、ごく簡単に説明したい。

まず、一版は、一五二六年十二月、ベルギーのルーヴァンで、ティエリ・マルタン書店から出版された。この版の出版にはエラスムスとヒレスが監督をしている。

二版は一五一七年、フランスのバリで、ジル・ド・グルモン書店から出版されている。イギリスの古典学者トーマス・ラプセットが監督し、モアが校正をしている。

三版は一五一八年三月、スイスのバーゼルで、ヨハン・フローベンの書店から出版された。エラスムスとペアートゥス・レナーヌスが監督をしている。この版もモアが校正しており、従ってモア自身が校正している最終版ということになる。フローベンは、エラスムスの『平和の訴え』を最初、『ユートピア』と一緒に出版しようとしたらしい。表題頁の欄外飾りはハンス・ホルバイン作のキリスト

『ユートピア』（本文とパラীগ）出版について

	出版年月日	一版	二版	三版
	出版地	一五・六・十二 ルーヴァン	一五・七 パリ	一五・八・三 バーゼル
	出版者	デュエリ・マルタン	ジル・ド・グルモン	ヨハン・フロベッ
1	エラスムスからフローベンへの書簡			○
2	ビュデからラアセットへの書簡		○	○
	地図一（一五二八年版）と宿舍庭園図			○
	地図二（一五二六年版）	○		
	ユートピアのアルファベット	○		○
3	ユートピア慣用語の四行詩	○		○
4	ユートピア島についての六行詩（桂冠詩人作）	○	○	○
5	ヒレスからブスライデンへの書簡	○	○	○
6	デマレからヒレスへの書簡	○	○	
7	デマレによるユートピア新島についての詩	○	○	
8	ナイメーゲンのヘーラルト作 「ユートピアについて」	○	○	○
9	コルネーリス・デ・シュライファーが読者に			
10	ブスライデンからモルスへの書簡	○	○	○
11	モルスからヒレスへの第一の書簡	○	○	○
12	モルスからヒレスへの第二の書簡		○	○
13	レナーヌスからビルクハイマーへの書簡			○

の茨の冠をいただく頭とルクレティアの自殺である。

四版は一五二八年十一月、フローベン書店から出版されている。
地図やパラীগも含めて三版をほぼそのまま再版している。

『ユートピア』の虚構性と植民戦争（久野幸子）

以上、執筆および出版状況について、現在までに知られている事実をまとめてみた。各版について、本文は確かにモアの書いたものであるが、欄外小見出しは友人たち（エラスムスとヒレス）がつけたものであり、出版は、モア自身とエラスムスやほかのヒューマニストたちや出版者との共同作業であったようである。

では、これらの事実は何に物語っているのだろうか。モアは地図やパラীগも含めて、三版のみを最終決定版として後世に残したかったのではないのか。いや、そうではないらしい。結局、出版を取り巻く諸事情は、作者モアが、三版だけではなく、それ以前の版も否定するどころか、尊重していたことを暗示していると思われる。そもそも、モアがこの作品の執筆を開始したのは、一五二五年七月、生前最後の出版が行なわれたのは一五二八年十一月、つまり、執筆開始から生前出版終了まで約三年四カ月の月日が流れている。そのうえ、モア自身がその期間中この作品について友人たちと活発な意見交換をしているのだから、結果として、作品に対する彼自らの意図を幾分変化させたとしてもそれほど不思議ではなからう。とはいふものの、現在の私たちには、地図やパラীগを含めてこの作品に、だれがいつ、どこで、どのように関与したのかを徹底的に追及・断定することは至難のわざである。むしろ、私たちに出来ることは、逆に、モア自身、『ユートピア』の読者による解釈や理解が出版状況や出版状態につれて微妙に変化することを甘受していた、

いや、むしろ楽しんでいた、と受け止めることでないだろうか。結局、作品『ユートピア』とは、本文だけでなく、地図やパラガも含めたものの総称として捉えるべきであり、実を言えば、一九九〇年代以降、多くの人々が地図やパラガの本文に対する効用を指摘するようになっていく。そこで、筆者もこれらの効用について、次に検討してみたい。

三 地図やパラガの効用

(一) では、地図やパラガを本文に添えることによって、モアはどのような意図を伝えることができたのだろうか。そもそも、現実にはありえない理想の社会を描く架空旅行記を執筆・出版するに際し、モアにはこのユートピア国をいかにも実在していそうなどころとして描く必要があると同時に、実際にどこかに実在するなどと決して読者に思わせないための配慮も必要であった。これは扱いが難しい矛盾する課題である。その課題達成のためにモアが用いた文学的手法や技巧はいろいろあると考えられるが、地図やパラガにもそれを意図したものがあろうである。そこで、本稿では以下の四つの点に注目し、モアの意図を考察してみたい。

第一に注目したいのは、ユートピア国の地図である。地図一は一五一六年版(一版)に添えられている画家不詳の木版画で、スケッチとも呼ばれている。地図二は一五一八年版(三版)に添えられて

「地図 2」

UTOPIAE INSVLAE TABULA (1518).



「地図 1」

MAP OF THE ISLAND OF UTOPIA (1516).



「宿舎庭園図」



Io, Clemens. Hythlodæus. Tho, Morus. Pet, Aegid.

ヒュトロダエウス（左より二人目）の話を聞くモルスとヒレス

いるアンブロシウス・ホルバイン作の木版画である。三版には宿舎庭園の木版画も添えられている。

モアは一版には地図一を添えて出版したが、二版には地図は添えていない。三版には、地図一を参考になっているが、かなり修正した

『ユートピア』の虚構性と植民戦争（久野幸子）

地図二を添えている。本文中の第二巻冒頭にあるユートピア島の地勢の説明が極めてまぎらわしいことはよく指摘されるが、その説明と地図一を比べると、疑問点がいくつか思い浮かぶ。しかし、一層問題となるのは、地図二である。ところで、これらの地図について、一九八五年、ウォレン・W・ウッデンが興味深い分析を行なっている。ウッデンは一見したところ、地図二は地図一よりユートピア国をより詳しく描いているような印象を与えるが、実はユートピア国が実在しないという点を地図一以上に強調したものであると主張する。これは重要な主張であると思われるので、筆者もウッデンの分析に言及しつつ、自分なりの分析をつけ加えてみたい。

まず、地図一にはなかったのに、地図二には三枚のボードが花鎖で上からぶら下げられている。これはなぜか。筆者はここで、モアはルキアノスの『本当の話』にでてる「ばらの花紐」を暗示している⁽⁸⁾と捉えたい。『本当の話』では、旅行者たちがあの世に行ったとき、正体ははっきりするまで、ばらの花紐でしばられているが、この地図二では、ユートピア島を流れるアーニウドルス河の源泉や河口の位置を示すボードや、都市アマウロトゥムの名称ボードが花鎖でつるされている。また、地図二に描かれている四人の人物（鼎談中の三人と、もう一人船に乗っている人物）が、注意してみると、確かにそれぞれ勝手な方向を見ているがこれはなぜか。ウッデンは視点の違いを暗示していると推測しており、筆者も同様に考えたいと思う。では、教会と思われる建物の塔の上に描かれた十字架につ

いてはどのように説明できるのだろうか。信教の自由をユートプス王のご遺志として建国以来遵守してきたユートピア国の人々が、ついにヒュトロダエウス一行が伝えたキリスト教に改宗したということを暗示しているのであろうか。本文を読む限り、ヒュトロダエウスはそのように断定してはいないので、地図二の十字架は本文の語りと矛盾している。そのうえ、これらの地図には、当時の地図には通常付けられている縮尺の表示もなく、そのほかの必要事項も一切記入されていない。以上の諸点から、モアが地図を添えることで、ユートピア島の実在について、わざと読者の読みの攪乱を図っているとしか考えられない。

第二に注目したいは、パラガに書き込まれた、ユートピア島が実在する、あるいは実在可能であると思ひ込む読者への警告である。たとえば、「モルスからヒレスへの第一の書簡」、これは三つの版に載っているが、この書簡のなかで、モルスはユートピア島が実在すると勝手に思ひ込む読者について議論しており、とくに、布教に出かけるためにユートピア島の正確な位置を知りたいというひとりの神学者について、次のように語っている。

特に一人、新奇なものをみてやろうという空虚な好奇心からではなく、あそこで、めでたく開花したわれわれの信仰を促進し普及するために、ユートピアへ旅立とうという感嘆すべき望み

で燃えているひとりの敬虔な神学者がいるからです……教皇によって派遣され、ユートピアの司教に選定してもらおうと決心しました(五〇)。

ここで、モルスが暗に批判しているのは、架空の島であることを見抜けない「敬虔な神学者」の石頭であり、教皇によって派遣され、「ユートピアの司教に選定して」もらえさえすれば、ユートピア人への布教がうまくいくと考える彼の愚かしさであり、さらに右記の引用に続く部分に暗示されている、ユートピア島の司教に選定されたいという彼自身の個人的野心を、すなわち、「こういう獵官を、榮譽とか儲け目当てではなく、(宗教的)畏敬心からでた聖なるもの」であると自ら勝手に思ひ込む彼の傲慢さであろう。

もっとも、この書簡の最後の部分で、モルスはヒレスに架空の人物であるはずのヒュトロダエウスに直接会ってこの作品を出版することの是非について聞いてほしいと頼んでいる。このように、どこまでが真実でどこまでがうそか、まことにまぎらわしいのが、モア流の書き方である。

第三に注目したいのは、モルスがパラガのあちこちで文学の本質について議論している点である。一例を示せば、二版のみに載っている「モルスからヒレスへの第二の書簡」では、モルスはある読者、この『ユートピア』を全部慎重に読み通したらしい特定の読者

の反応について、次のように極めて真面目に議論している。

最後に、彼は私を批判することは自体によって、思惑あって私をほめてくれた人たちよりもはるかに大きな賞賛を呈してくれています。というのは、私にとっては、もし多くのことの中で全く不条理ではないことを少なくともいくばくか書くことができればそれは私にとっては期待を越えるできごとであるのに対し、もし十分正確でないことを読むと期待を裏切られたと愚痴こぼす彼、そういう彼の言葉は彼が私をいかに高くなってくれているかを端的にしめすものだからです（二四八）。

右記のように、その読者が丁寧に読んでくれていることを感謝しながら、自分が「全く不条理ではないことを少なくともいくばくか書くことができれば」それは自分にとって「期待を越えるできごとである」としたあと、読者が、自分自身を「鑑識眼のある」（二四八）人間と過信していることを指摘し、

彼はユートピアの諸制度のなかに半ば不条理なものをいくばくか発見したとか、社会政体の形成に十分役立たぬものを私が案出したとして、まるで不条理なものは皆無というところが諸民族のあいだのどこかに存在するかのよう……（二四八）

言っていると、その読者を批判し、優れた哲学者たちでさえ、あとで自分がそれまで完璧と考えていた制度を「変革されたほうがよい」（二四八）と考えるようになるものだと述べている。そして、この人間世界での不条理はいたしかたないことであり、大衆の無知を悪用するつもりなら、「どこにもない島」や「消え去る都市」「水無し河」「民なき君主」（二四九）などという名前はつけなかっただろうとつけ加えている。ここで、モルスは一人の読者だけでなく、読者一般、すべての読者に文学の本質である虚構性を理解してほしいと願っているのだと思う。この箇所では、モルスがはっきりと「不条理なもの」は皆無という（二四八）ような社会政体などあるわけがない、つまり、完璧な理想社会など存在しないと語っているのは注目に値しよう。

この書簡の後半では、テレンティウスの「アンドロス島の女」に言及し、この劇のなかで信頼できる証人が居合わせたことが神々に感謝されているように、ヒュトロダエウスの話を聞いたのが自分たちだけではなかったことが嬉しいと言っている。そして、それでもヒュトロダエウスの話を信じないひとがいたら、「ヒュトロダエウスのところに行かせなさい。彼はまだ、死んでいませんから」（二五〇）と指示している。このように冗談と真面目な議論を並存させるのがやはりモア流なのであるう。

第四に注目したいのは、モアはこの作品のなかで実在の友人たち

とのゲームを楽しんでいると思われる点である。私たちには、モアがパラードでも、自分自身やヒレスだけでなく、エラスムスやギヨーム・ビュデ、ブスライデン、ジャン・デマレたちまで、虚構の対象にしていることを再認識する必要がある。なぜなら、まず、モアは『ユートピア』の表題で、自分のことを「傑出せる人物・トマス・モア」などとぬけぬけと自賛しているが、『ユートピア』に登場する作中人物のヒレスが、実在のヒレスと全く同じ人物であるわけもなく、詩や書簡を書き、あるいは書簡中で言及されている、エラスムスを始めとする他の友人たちも、現実の友人たちそのままの人物であるという証拠もない。つまり、これらの詩や書簡の書き手も受け取り手も、ヒュトロダエウスとユートピア国が虚構であることは十分承知しているはずなのに、必要に応じて、ヒュトロダエウスが実在の人物であるかのように、彼の語るユートピア国が実在するかのように対話している。友人や知人たちはモアのしかけたゲームに進んで参加してくれているのである。

また、澤田昭夫氏が作品の翻訳書のあとがきで示唆しているように、この作品全篇を「対話的構造をもった芝居」(三〇五)と捉えることも可能であろう。と、すると、モアは舞台監督として、友人や知人たちに自由に必要なとする役割を割り振っているとも言える。エラスムスへのある書簡で、モアは特定の政治家や宮廷人に『ユートピア』への推薦書簡を書いてもらって欲しいと依頼しているが、この事実にはモアの世俗的野心を示すというより、彼にはこの対話劇に

政治家や宮廷人を登場させる必要があったと捉えるべきではないだろうか。

以上、地図やパラードの効用について考えた。モリソンはこの『ユートピア』をメタユートピアとして分類し、左記の引用のように解説しているが、モアは確かにこの『ユートピア』のなかで、ジャンルとしてのユートピアについて考察している。そして、この作品が虚構性に富むということは、読み手のユートピアというジャンルに対する考え方によって、いろいろな解釈され得るということでもある。しかし、モアは警告を発することも忘れてはいないのである。

Much of the controversy regarding More's work is, in effect, controversy as to its genre. That is, the meaning of Utopia — like the meaning of all literally works — depends on the reader's assumptions about (1) the appropriate conventions for interpreting the work, and (2) the literary tradition in which it is placed.

モアの作品に関する論争の大半は、事実上、そのジャンルについての論争である。つまり、『ユートピア』の意味は—すべての文学作品の意味のように—(一) 作品を解釈するのにふさわし

い慣習と(二)それが分類される文学的伝統、についての読者の仮定に依存しているのである。

そこで、再び、本稿の冒頭で論じた戦争の問題に戻り、モアと植民戦争について、この虚構性という特徴を考慮しつつ、考察してみたい。

四 『ユートピア』における植民戦争

(一)『ユートピア』批評史を調べてみると、確かに『ユートピア』論は数限りなくあるが、(ユートピア国における戦争)については余り議論されてこなかったということがわかる。戦争そのものが理想社会とはどうしてもそぐわなかったからであろうか。どの時代の読者も、理想社会を描いていると思われる『ユートピア』のような作品を読む場合、往往にして自分に都合のいいところだけを読むきらいがある。一九六二年、『ユートピア』における戦争と奴隷^①という優れた論文を発表したシュロモ・アヴィネリが、次に引用するような『ユートピア』の読み方がモアの同時代以降十九世紀まで続いたことを指摘しているが、

This approach sees Utopia as either humanistic or Christian ideal come true, and as chapters on war does not fit into this pattern, it is mostly tacitly overlooked.

『ユートピア』の虚構性と植民戦争 (久野幸子)

この読みは、ユートピアを人文主義的、あるいはキリスト教的理想を実現するものとして捉えるので、戦争に関する章はこの典型に適合しないものとして、大抵は暗々裡に無視されてきた。

なるほど、多くの学者が戦争に関する章は黙って見過ごしてきたようである。二十世紀に入っても、たとえば、G・R・ポッター(一九二五年)はユートピア国の戦争についてはさりげなく触れているだけ、A・L・モートン(一九二六年)は戦争について全く触れていない。カール・カウツキー(一九二七年)は「軍事について」の章を風刺と捉え、H・W・ドナー(一九四五年)は同じ章をモアの皮肉と捉えている。

(二)さて、ここでは、ユートピア人の戦争論、とくに戦争を正当化する理由について具体的に考えてみたい。ヒュトロダエウスはユートピア人が戦争を行う理由を次のように三つ挙げているが、

彼らは、自分たちの国境を防衛するためか、友邦の領土に侵入した敵を撃退するためかそれとも僭主制で圧迫されている民族に同情して(これは人情からします)彼らを僭主制の桎梏と隷属状態から解放してやるためでなければ、軽率に戦争という手段に訴えることをしません。友邦を援助してやるのは、必ずし

も防衛のためだけでなく、彼ら（友邦）にたいしてなされた不法行為にたいする報復、処罰のためである場合もあります（二〇三）。

ユートピア人は、現実にはそれら以外の理由でも戦争を行なっていた。植民戦争である。第二巻の「相互のつきあいについて」という別の章で、この驚くべき事実は次のようにさりげなく語られている。

しかし、もし全島の人口が適量を超えて増加することがあれば、すべての都会から一定の市民たちが選りぬかれ、近隣の大陸で、原住民が可耕地をあまりあるほどもってはいるが、農耕は行なわれていないというようなところに送られ、自分たちの法のもとに植民地をつくります。もし原住民たちが共存することを望めば、いっしょにその植民地に受け入れてやります。共存を望む原住民たちと彼らは同じ生活様式、同じ風習で一つになり、容易に融合同化します。これは両方の人々に益するところとなります。というのは、こういうやりかたで彼らは、原住民たちが狭く不毛だと思っていた土地を、両方の人々にとってありあまるほど（肥沃）にするからです。彼らの法に従って生活することを原住民が拒めば、自分たちで定めた境界線の外に追い出します。抵抗する人々にたいしては戦争を行ないます。

なぜならもし、ある民族がその土地を自分で使用せず、（かえって）いわば空漠、空地のままですべて所有しながらも、自然の掟に従って当然そこから生活の糧を得るはずの人々にたいしてはその使用や所有を禁じるという場合、彼らはそれを戦争の最も正当な理由と考えているからです（一四三）。

このように、ユートピア人は「（原住民で）抵抗する人々にたいしては戦争を行ない」、この植民戦争を正当化する理由として、「ある民族がその土地を自分で使用」しない場合、つまり、有効利用できる土地を原住民が空地のまま所有する場合の弊害をあげている。確かに、この「自然」の掟を根拠とした議論は一見論理的に見える。しかし、原住民がユートピア人の身勝手な植民行動に抵抗することが即「自然」の掟に逆らうということではないし、原住民に農業による土地の有効利用を教えることのほうが、自分たちが原住民から土地を取り上げて農業を行なうより、より一層「自然」の掟にかなうことは一目瞭然である。つまり、ユートピア人は自分たちに都合のいい誤った三段論法で、原住民からの土地収奪を正当化しているのである。

ところが、ヒュトロダエウスは「軍事について」の章でユートピア人の戦争の正当性を論じたとき、この植民行動を第四の理由とすべきなのにまったく言及していない。この点について、エリザベ

ス・マカッチョンが「便宜的に（あるいはあまりに便宜的に）⁽¹²⁾」忘れて
いると指摘しているが、同感である。そして、私たちはユートピ
ア人のこの植民戦争正当論は、ほかの戦争を正当化する論理と矛盾
していることに容易に気づく。つまり、モアは、ユートピア人の主
張する「正義の戦争」論が、自己矛盾に満ちたものであることを暗
示しているのであろう。しかも、ユートピア国の起源についても、
本稿冒頭でふれたように、ユートプス王が、すでに原住民が住んで
いるところに武力を用いて侵入し、ユートピア国を建国している
(一一一)。これは明らかに正義の戦争ではなかった。

もっとも、ヒュトロダエウスは右記の引用にすぐ次のような説明
をつけ加え、ユートピア人による植民戦争には、後世のイギリスの
植民地主義者、帝国主義者と違って自国の領土拡大への意思・意欲
がないことをさりげなく強調している。

もしなにかの偶然で彼らの都会のうちのどれであれ、それが
個々の都市の人口を定数内に維持しながら（それ以下にきげず
に）島の他の部分からの人口補充をすることができないほどに
収縮すれば（こういうことは有史以来二回だけ、悪疫大流行の^{ペステス}
ために起こったそうです）、植民地からの帰郷民で補充されま
す。つまり彼らは、島の都会を一つでも衰退させるよりは植民
地をなくしたほうがよいと思っていますのです（一四三—一四四）。

『ユートピア』の虚構性と植民戦争（久野幸子）

確かにユートピア国は自国の島が理想状態であり続けるために、余
剰人口用の植民地獲得を目指して植民戦争をする。しかしながら、
引用のなかで書かれているように、現実には、ユートピア国は「悪
疫大流行」のため、人口減少に悩み、「有史以来二回」、植民地から
ユートピア本国出身者を帰郷させている。

このように私たちは、ヒュトロダエウスがユートピア人の植民戦
争正当論を展開しているのを読むが、モアがこの植民戦争を肯定し
ていたと読むことはできない。これはユートピア人の論理であっ
て、モアのそれではないからである。

(三) ところで、このユートピア人の植民戦争正当論に着目した
のが、H・オンケン⁽¹³⁾であった。第一次大戦と第二次大戦の中間期の
一九二二年、ドイツのオンケンが新解釈を発表し、モアの『ユート
ピア』を「イギリス帝国主義のバイブル⁽¹⁴⁾」とした。ヴェルサイユ条
約後のオンケン及びドイツ学派は、自分たちのドイツ帝国建設のた
めに、『ユートピア』のこの植民戦争をわざと帝国主義的に誤読した
のである。アヴィネリはこの点をつぎのように説明している。⁽¹⁵⁾

...the Utopians have no way out but to colonize, and Oncken sees
in More's justification of colonization the justification of a possible
expansionist's policy towards Ireland, perhaps towards newly-
discovered America.

ユートピア人は植民するしかなく、そして、オンケンはモアの植民政策正当化にアイルランドへの、おそらく、新しく発見されたアメリカへのイギリスの領土拡張論者の政策の正当化がある^⑮とみている。

勿論、ユートピア国には、オンケンによって指摘された植民戦争正当論以外にも、『ユートピア』を『ヘギリス帝国主義のバイブル』と命名したくなるような理由がないわけではない。ユートピア国の軍事制度のほかに、経済的に友邦国を支配しようとする姿勢、友邦国にユートピア人をお役人として送り、彼らに贅沢な暮らしをさせるシステムなど、十八世紀・十九世紀におけるイギリス帝国主義政策を思わせる事柄が多く書かれている事実は否定できない。が、この植民戦争そのものは帝国主義的ではない。

(四) しかし、この植民戦争正当論を根拠に『ユートピア』を『ヘギリス帝国主義のバイブル』とする捉え方は、実は現在でも生き残っている。オンケンから約五十年後、D・B・クインが一九七六年、モアがラテン語のコローニヤ^⑯という意味の英語、コロニーを使った最初の人であったことを指摘し、モアが植民行動・植民戦争を正当化していると主張した^⑰。続いて、一九九〇年代にもジェフリー・ナップがクインの誤読を踏襲し、一九九二年、次のように述べている^⑱。

...according to D. B. Quinn, More in *Utopia* even "appears to be the first Englishman to use the word *colonia* in a Roman [i.e., imperialist] meaning". And More's Utopian colonial theory, which turns the accusation that a land is "idle and waste" into a justification for colonizing it, came in fact to be repeated, time and again in the American propaganda of Renaissance England.

クインによると、モアは『ユートピア』のなかで、ローマ人の「すなわち帝国主義者としての」意味で「コロニア」という語を始めて用いたイギリス人のように見える。そして、土地が「何も生み出さず、不毛である」という非難を植民地化への正当化に変えるモアのユートピア人の植民地化正当論は、事実、ルネサンス期のイングランドのアメリカ植民の宣伝文句としてたびたび繰り返されることになった。

ナップは右記の引用に続けて、彼の主張を擁護する歴史的事実として、モアの義兄のジョン・ラステルによって同じ頃行なわれたアメリカ植民計画(一五一七年)に言及しているが、マリーナ・レスリー^⑲(一九九八年)やデービッド・アーミティージ^⑳(一九九八年)が指摘するように、それは現実には挫折した計画であり、その目的は領土の拡大とキリスト教の布教と原住民への興味であったから、ユートピア人の植民行動の目的とは同じではなかった。結局、この

問題については、アーミティジの次の総括が最もよく事情を説明していると思われる。

More's work set the limits to the possibility of planting overseas colonies, and appeals to the Roman model of *colonia* itself were rare before the 1620s. When used at all, the vernacular term 'colony' meant only the plantation of nucleated settlements within a foreign landscape, and carried none of the negative associations with exploitation and cultural domination that are implied by the much later term 'colonialism'.

モアの作品は、海外植民地建設の可能性の限界を定めており、ローマ人のコロニアをモデルにするという訴えそのものは、一六二〇年代以前にはまれなことであった。万一、使われたとしても、母国語で「コロニー」となった語の意味は、外国の風土に造られた新開地の集合体としての植民地のみを意味し、遙か後年に使われた用語「植民地主義」に含まれる搾取とか、文化的支配を連想させるような否定的なものは何も伝えてはいなかったのである。

『ユートピア』の虚構性と植民戦争（久野幸子）

五 結論

作品『ユートピア』から判断すると、作者モアは理想社会について論じる場合、軍事も必ず検討すべき制度のひとつと考えている。ヒュトログエウスが「軍事について」の冒頭で、「どんな野獣でも人間ほど絶え間なくそれ（戦争）に従事しているものはない」（二〇三）と述べているが、このことは人類の歴史を考えれば、だれもが認めざるを得ない悲しい現実である。そのうえ、モアには、彼自身が個人としてどれほど戦争を嫌悪していたとしても、戦争について議論することなく、人間にとっての理想社会を描くことなど到底できなかった。なぜなら、モアが生きた十六世紀初頭のヨーロッパはたえず戦争に明け暮れており、また、技術・工学の進歩によって、防衛戦争から先取攻撃戦争へ、つまり、各国が軍備拡張の方向へ向つてもいたからである。モアはヒューマニストとしては、エラスムスやビベスなどと同じように、ヨーロッパの良心であり、平和主義者であったが、この時期、モア家の家長として、すでにヘンリー八世に仕えるお役人となっており、その立場上、慎重な発言も要求されていた。モアはエラスムスを尊敬していたが、彼のような自由人ではなかったのである。

そこで、モアはこの『ユートピア』を書くにあたり、文学の虚構性を十二分に利用したと考えられる。理想社会を描きながら、一方で、なぜ、戦争が起こるのか、戦争の実態はどのようなものか、戦

後になにが問題となるのかなど、戦争についての議論もたっぷりできるような語りの構造を採用している。しかも、作者としてできるだけ多くの人々に楽しんで読んでもらうための工夫も盛り込んでいゝる。本稿冒頭でふれたように、第二巻の「軍事について」で、ヒュトロダエウスは一見、真面目にユートピア人の戦争のしかたを説明しているかにみえる。が、実はそこに描かれている戦争は、当時の戦争の実態とはかなりかけ離れた古めかしいものであったらしい。たとえば、すでにそのころ、戦場では大砲が使われ始めていたのに、ヒュトロダエウスはユートピア人たちの飛矢のような古い武器の使用についてのみ述べている。また、従軍司祭の件だが、宗教を異にする敵対する他民族のあいだでユートピア人の司祭たちが殺し合いをやめさせることが出来るほど崇拜されていることなどありえない。外人傭兵の件にしても、ザポーレート人の傭兵隊長が自分たちの戦死を秘かに願うユートピア国のために、たとえばどれほどの高給が約束されたとしても、大切な隊員たちを連れて危険な戦場に自ら進んで向かうはずなどないのである。それに、ユートプス王自身も傭兵隊長だったかもしれない。「女性は軍隊に同行したが、商人、看護婦、料理人のような役割についていた。男性と同じような軍事訓練は女性には無理ではないか」とマカッチョンも指摘しているが、女性に軍事訓練を受けさせ、戦場に子供と共に同伴するというユートピア人の軍事制度もタキトゥスの『ゲルマニア』での記述を再現してみただけではないか。モアはさまざまな風刺や皮肉、ユー

モアや機知を楽しんで書いている。真剣でいて、冗談も楽しむ、これがモアの文学的手法だった。

これまで述べてきたように、『ユートピア』はその虚構性ゆえにさまざまな読みを許容しているようにみえる。が、だからといって、モアがそれらの全てを認めていたわけではあるまい。「モルスからヒレスへの第一の書簡」でモルスが暗示しているように、このような読みは誤読であるという個別の指摘は許されるのではないだろうか。そこで、本稿では、ヘイギリス帝国主義のバイブル」という汚名だけは返上したいと思う。理由は、ユートピア人は人口増加の場合、戦争をして植民地を獲得するが、領土を大きくするという意図もなければ、そこから、搾取る意図もなかったこと、また、キリスト教を布教するという意図も、キリスト教の布教を隠れ蓑に帝国主義を広めようという意図もなかったこと、などである。そのうえ、イギリスのアメリカ大陸での植民行動が始まったのは、一六二〇年代であり、話題となったのすら、一五六〇年代である。つまり、『ユートピア』出版から五十年以上あとのことであり、ヘイギリス帝国主義のバイブル」と読むことはアナクロニズム（時代錯誤）だと思ふ。モアは愚かで、独善的、あるいはユーモアのセンスを欠いた『ユートピア』解釈を皮肉っている。モアが植民戦争を肯定していたとか、始めて法的に正当化したなどという解釈はモアがとくに嫌った解釈の一つであったに違いない。ヒュトロダエウスがそれらの点についてどこまで気づいていたのかはわからないが、ユートピ

ア人が彼らの身勝手な理論に基づいて植民地を建設し、必要に応じ、撤退する、ということ語っているだけなのである。

モアは理想主義者であると同時に現実主義者でもあった。モルスも第二巻の最後で、語り終えたヒュトロダエウスに向かって、「この問題についてもっと深く考え、そのうえでいっしょにもっとくわしく話しあう時がまたあるでしょうね」(二四五)と言ってから、食堂に案内した、という叙述で『ユートピア』の本文を締めくくっているが、結局、このように開かれた結末をもつ未完の対話『ユートピア』は、あらゆる時代の読者に〈結論ではなく議論の場〉を提供する文学作品であるといえよう。多くの批評家が指摘するように、モアはこの『ユートピア』を愉しく読んだ読者たちの間で真面目で真剣な論争が行なわれることを願っていた。そして、この第二巻の「軍事について」は、私たちにあって極めて重要な章であろう。なぜなら、核兵器の脅威に日々怯える私たち現代人は、ユートピア人と同様、いや、ユートピア人以上に、「戦争を極端に嫌って」いながら、自国が戦争に負けることを最も恐れているからである。

注

- (1) 本稿は二〇〇六年六月十七日に「十七世紀英文学研究会関西支部第一六三回例会」で口頭発表したものに加筆したものである。
- (2) Thomas More, *Utopia*, The Yale Edition of the Complete Works of Sir

『ユートピア』の虚構性と植民戦争 (久野幸子)

Thomas More, vol. 4, edited by Edward Surtz, S. J. and J. H. Hexter (Yale University Press, 1965).

トマス・モア著『改版ユートピア』澤田昭夫訳、(中公文庫、一九九三年)。この翻訳書からの引用は各引用の最後に丸括弧で頁数を示す。

- (3) Gary Saul Morson, "More's Utopia: Texts and Readings" *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Tradition of Literary Utopia*, (University of Texas Press, 1981), 164-175.

(4) J. H. Hexter, *The Biography of an Idea* (Princeton University Press, 1952).

(5) パラীগについては、モリソンを始め、多くの学者がその重要性を説いている。日本でも澤田昭夫氏は一九九三年、翻訳書のあとがきで「詩と書簡は、当時の世界の大ヒューマニストによる推薦状、PRであると同時に、本書の読み方について読者に向けて発信された信号である」(一九九)と述べ、田村秀夫氏は一九九六年、『トマス・モア』(研究社)で『ユートピア』の読み方を示唆しているこの付録は、対話の場を拡大して、当時のヒューマニストたちが、相互あるいはモアと対話の輪を拡げているのだ」(一一七頁)と書いている。

(6) イエール版に載っている地図(十一・一十七頁)を使用した。

(7) Wooden, Warren, W. "Thomas More and The painter's eye: visual perspective and artistic purpose in More's *Utopia*" *Journal of Medieval and Renaissance Studies* (1985), 231-263.

(8) ルキアノス著『本当の話 ルキアノス短篇集』呉茂一訳、(ちくま文庫、一九八八年)。四三頁。

(9) テレンティウス著『アンドロス島の女』木村健治訳『ローマ喜劇集』五巻 (京都大学出版会、二〇〇二年) 八九頁(七七〇―七七二頁)。

(10) モリソン、一六七―一七三頁。

(11) Shlomo Avineri, "War and Slavery in More's *Utopia*, *International Review of*

- Social History* 7 (1962), 260-290. 市田昌一「はくし頁から」。
- (21) Elizabeth McCutcheon, "War Games in *Utopia*" *The Portrayal of Life Stages in English Literature, 1500-1800*, ed by Jeanie Watson, Philip McM. Pittman (The Edwin Mellen Press, 1989), 29-56. 市田昌一「国風から」。
- (23) Herman Oncken の「ユートピア論」を「Die Utopia des Thomas Morus und das Machtproblem in der Staatslehre」にのせて、トーマス・モアの解説や参考文献を添えて (Avineri, 271-276.)
- (24) 田村秀夫著『トマス・モア』の四章「ユートピアの政治」の四節「イギリス王国主義のハイフル」からコメントを導き、本稿に使わせていただいた。
- (25) トーマス・モア「ユートピア」。
- (26) D. B. Quinn, "Renaissance Influence in English Colonization" *Transactions of the Royal Historical Society*, Fifth Series, XXVI (1976), 73-93.
- (27) Jeffrey Knapp, *An Empire Nowhere* (University of California Press, 1992), 21.
- (28) Marina Leslie, *Renaissance Utopias and the Problem of History* (Cornell University Press, 1998), 46-49.
- (29) David Armitage, "Literature and Empire" *The Origins of Empire*, ed by Nicholas Canny (Oxford University Press, 1998), 99-123.
- (20) McCutcheon, 44.

引用文献

- More, Thomas, *Utopia*, The Yale Edition of the Complete Works of Sir Thomas More, vol. 4, 1965.
- モア・トマス著『改版ユートピア』澤田昭夫訳、中公文庫、一九九三年。

- Armitage, David, "Literature and Empire" *The Origin of Empire*, edited by Nicholas Canny, Oxford University Press, 1998, 99-123.
- Avineri, Shlomo, "War and Slavery in More's *Utopia*", *International Review of Social History*, 7, 1962, 260-290.
- The Faber Book of Utopias*, edited by John Carey, faber and faber, 1999.
- Hexter, J. H., *The Biography of an Idea*, Princeton University Press, 1952.
- Knapp, Jeffrey, *An Empire Nowhere*, University of California Press, 1992.
- Leslie, Marina, *Renaissance Utopias and the Problem of History*, Cornell University Press, 1998.
- トーマス・モア『ユートピア』市田昌一訳、岩波文庫、一九九二年。
- McCutcheon, Elizabeth, "War Games in *Utopia*" *The Portrayal of Life Stages in English Literature, 1500-1800, Infancy, Youth, Marriage, Aging, Death, Martyrdom*, ed by Jeanie Watson, Philip McM. Pittman, The Edwin Mellen Press, 1989, 29-56.
- Morson, Gary Saul, "More's *Utopia*: Text and Readings", *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia*, University of Texas Press, 1981, 164-175.
- Quinn, D. B., "Renaissance Influence in English Colonization" *Transactions of the Royal Historical Society*, Fifth Series, XXVI 1976, 73-93.
- 田村秀夫著『トマス・モア』研究社、一九九六年。
- テレンティウス著「アンドロス島の女」木村健治訳『ローマ喜劇集 五巻』京都大学出版会、二〇〇二年。
- Wooden, Warren, W., "Thomas More and the painter's eye: visual perspective and artistic purpose in More's *Utopia*" *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 1985, 231-263.